広国ドリル(国語)のポイント　その5　敬語の話

国語の 5 回目(最終回)です。

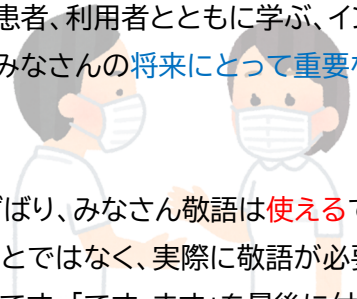
まず、前回のクイズの解説です。英語には、日本語と違って「が」「を」「に」のような助詞がないのに、文の意味が分かる理由ですが、わかったでしょうか？　簡単に言うと、英語は語順で主語、述語、目的語の関係を表しているからです。英語を習い始めたころ、SVO という謎の記号を勉強した人もいると思いますが、あれです。日本語に当てはめれば、S が主語、V が述語、O が目的語です。英語の文は、この順序が決まっているので、語句の位置で主語や述語が分かります。

日本語は、多少語順が入れ替わっても、助詞がくっついていれば、主語や目的語を見失うことはありません。日本語は語順が自由だと言われることもあります(実はそれほどでもないですが)。いずれにしても、日本語では助詞が重要な働きをしていることは、意識しておいてください。

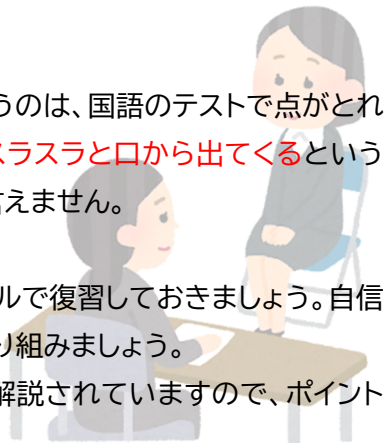
今回は、敬語の話をします。

これまでの国語の授業で、敬語が主な学習対象となる時間は少なかったと思います。文章を読んだり書いたりというときは、あまり使いません。どういうときに必要になるかというと、人と話したり、人に手紙を書いたりするとき、要するに、人とやりとりするときです。

大学、実社会では、格段に人間関係が広がります。大学で学び始めると、クラスメートの前で発表をする、かなり年上の教授と話す、アルバイトで接客をする、大学祭で学外の人に頭を下げて回る、ボランティア活動で地域の人といっしょに活動をする、実習で病院や学外施設の職員、患者、利用者とともに学ぶ、インターンシップや就職活動で企業や施設の人と接するなどなど、みなさんの将来にとって重要な場面で、敬語が必要な相手と接する機会がたくさんあります。



ずばり、みなさん敬語は使えるでしょうか？　「使える」というのは、国語のテストで点がとれることではなく、実際に敬語が必要な場面で、必要な敬語がスラスラと口から出てくるということです。「です・ます」を最後に付ける程度では、使えるとは言えません。



自信がある人は、自信を確かなものにするために、広国ドリルで復習しておきましょう。自信がない人は、自信をつけるために、今のうちに広国ドリルに取り組みましょう。

敬語に関する基本的なことは、すべて広国ドリルで丁寧に解説されていますので、ポイントだけ書いておきます。

尊敬語と謙譲語を混同しやすい人は、まず形をしっかり覚えましょう。たとえば、「いらっしゃる」「おっしゃる」「召し上がる」は尊敬語、「うかがう」「申し上げる」「いただく」は謙譲語など、国語で勉強したこと、したけど忘れたことを、もう一度復習しましょう。

そして、普通体の動詞から、尊敬語や謙譲語をつくる「公式」も覚えましょう。尊敬語は、動詞に「～れる／～られる：書かれる／来られる」「～になる：お尋ねになる」などを付けてつくります。謙譲語の最も基本的な公式は、「お(ご)～する：お呼びする」です。この形は、「お願いする」など、よく使われていますが、謙譲語だとは気づきにくいので、注意して覚えましょう。

あとは、尊敬語と謙譲語の使い分けです。尊敬語は「相手を高める」、謙譲語は「自分がへりくだる」とよく書いてありますが、現代の人間関係では、そのような意識が希薄になってきています。人間関係に「上下」を設定するのは、あまり好ましくないという人もいます。

いろいろな考え方があってよいとは思いますが、シンプルに、尊敬語は、敬意を払うべき相手がすることや、その持ち物、身内を表すときに使い、謙譲語は、自分や身内が敬意の相手に対してすること、自分や身内に関することについて使うと覚えてみましょう。要するに、主語や持ち主が違うということです。「お客様が召し上がる(尊敬語)」「私がいただく(謙譲語)」という感じです。

基本的なことを復習したら、あとは実践です。いきなり使うのが怖い人は、テレビドラマや小説、マンガ、あるいは買い物などの日常の場面で使われている敬語を、広国ドリルで学んだ知識をもとに、よく観察しましょう。どのような場面で、誰が誰に対して、どのような敬語を使っているか、観察して考えながら、身につけていきましょう。もちろん、身近な大人に聞いてみるのもおすすめです。

大学に入ると、確かな国語力の必要性を痛感すると思います。これまでの内容も含めて、広国ドリルで復習して、「忘れ物」をせずに、大学にきてください(「くださる」は尊敬語)。大学の授業で、確かな国語力を身につけたみなさんにお会いする(「お会いする」は謙譲語)のを楽しみにしています(「ます」は丁寧語)。

健康科学部医療福祉学科　杉本　巧